

◎アドヴォネクスト

耕作放棄地を減らし地域活性化に貢献する老舗印刷会社

山梨県甲府市内の鍛冶屋街で代々鍛冶屋を営んでいた井上熊三郎氏が、印刷業への業態転換を図ったのが明治41年。伝票類や封筒、名刺など事務用品の印刷をメインに事業基盤を確立し、1978年に流通団地内に引っ越して以降はDTPをいち早く導入、チラシやIR文書、広報誌など幅広い印刷物に活躍の場を広げてきた。老舗印刷会社であるアドヴォネクストが農業に参入したのは2008年。その理由について井上雅博社長は次のように語る。

「エコロジー元年といわれた07年、カーボンオフセットという言葉がメディアを賑わしました。本社のある山梨県中央市はナスやトマト、トウモロコシなどの野菜栽培が盛んなこともあり、当社でも実際に農作物を生産し、収穫した後に処分する枝や葉っぱなどの残さから紙を生産してみようと試みたのがきっかけです」

とはいえ農業はまったくの門外漢。まずは県の農政課を相談に訪れた。すると中央市農政課や地元「農業にはどうしても必要になる初期投資を抑えるため、コンバインをはじめとした機械をできるだけ保有しない方針で運営しています。田植えや収穫などの繁忙期には作業を委託しています」（井上社長）

はじめはJAに販売することを検討したが、直接消費者や卸売り企業に販売することを選択。現在は生産した米の大半を、地元山梨県の米穀卸売り会社である吉字屋穀店へ直接販売している。「中央市の推奨銘柄であるヒノヒカリ以外については、農閑期に詳細な打ち合わせをし、次のシーズンで栽培する銘柄について話し合います。当社はその結果指定された米を生産し、全量買い取ってもらいます。つまり最初から売れる米しか作らないのです。最近では米粉用のミズホチカラ、飼料用米、もち米などを生産しました。ここ数年安定的な取引をさせていたただいたおかげで単年度黒字を継続できるとなりました」（井上社長）

同社が借り受けている農地は現在全部で約7ヘクタールだが、場所が中央市など県内35カ所に分散している。従って規模のメリット

の直売所組合の関係者を紹介してくれた。まもなく小さな土地を借りることができ、ジャガイモやトウモロコシ、大根などの栽培をスタートする。

「最初は社員が交代で週末に作業にあたりました。収穫した野菜は従業員に分けたり、みんなで料理をしてカレーを食べる社内イベントを開催したりしました。直売所組合員の方に技術指導を受けながら2年間ほど『週末農業』を行いました」（井上社長）

当初の目的だった紙づくりを移行に移し、植物残さを原料に和紙と洋紙をつくったが、商用レベルで生産するにはコストがかかりすぎるのが分かった。井上社長はそれよりもむしろ、農業そのものへの関心を強めていく。生産農家とともに汗を流していくなかで、



農業専従の村松紀さん



田んぼから富士山をのぞむ



井上雅博社長

地域のさまざまな農業の実態を知ることになったからだ。とりわけ高齢化にともなう廃業する農家が後を絶たず、耕作放棄地が拡大の一途をたどっていることに心が痛んだ。

「農家の方に会う機会を重ねるにつれ、『農地を借りてほしい』という要望がいくつか寄せられようになりました。耕作放棄された田んぼですぐに背丈を超える雑草が生い茂ってしまいます。なんとか地域の景観を守りたい、その一念で農業法人を設立することを決めました」

を追求するのは難しいが、取引先からの細かい要望に真摯に応えることで信頼を積み重ねてきたのである。

同社は今後、消費者への直接販売にも力を入れていく予定だ。年間2、3回、得意先や取引先に約2500通送付している広報誌に自社生産の米のチラシを同梱、現在年間数十万円の売り上げがあるという。コロナ禍で通販市場が一気に拡大したこともあり、今年は本格的なECサイトづくりにも着手した。

レンゲの花プロジェクトに参加

農業への新規参入でたびたび話題にのぼるのがJAとの付き合い方だが、井上社長は良好な関係を構築してきたと自負する。

「世間には『JA不要論』を唱える人もいますが、私はそうは思いません。JAの方に相談に乗っていただき、指導していただけたらここまでするのには厳しかったでしょう。資材の購入や検査の依頼などを通じて良いお付き合いをさせていただいています」

井上社長の持論は、農業関係者をはじめとした地域コミュニティとの良好な関係が事業を継続

かつてに比べ緩和されたとはいえ、食の安全保障や国土保全に大きな影響を及ぼす農業は規制の多い業界である。農業委員会が認めない限りは法人が農地を持つことはできない。農地を借りる際の農地中間管理機構との交渉も、法人のほうがスムーズだ。こうして同社は11年に農業法人とみ農園を設立、アドヴォネクスト社員を農業専従者として配置替えし、農業に本格参入した。

当初はトウモロコシ、ジャガイモ、ダイコンなどの露地野菜を栽培していたが、すぐに方向転換を余儀なくされる。①なかなか利益が出なかったこと②野菜の収穫時期と本業の印刷事業（特に企業期のIR系印刷物の受注生産）の繁忙期が重なること——などの要因から、16年ごろから栽培作物を米一本に絞ることにした。野菜に比べ機械化が進んでいる米の方が計画的・効率的な生産が可能だと判断したからである。さらに事業リスクの低減を図るため、「持たざる経営」を実践した。

するにあたりもとても大切だということ。すでに単年度黒字化を実現したたのみ農園だが、井上社長の頭には常に地域貢献の二文字が真っ先に浮かぶ。

「私たち中小企業は地域に稼がせていただいています。その地域の元気がなくなるのは一番困ります。地域が元気になるお手伝いをするのができれば、まわりまわって自分達も元気になることができるのです」

中央市では現在、農家に種を配布し冬の休耕田にレンゲの花を植えるプロジェクトが進行している。市町村合併前に行われていた取り組みを復活させようと地域一体となって進めている計画だが、井上社長は積極的に参加することを検討しているという。

「中央市全体で100ヘクタールの耕作放棄地がありますが、そのうち7ヘクタールを当社が借り受けて米を栽培しています。今後米の栽培面積拡大やレンゲの花を植えるなどして耕作放棄地を減らす取り組みを進め、将来的には事業基盤の安定化が見込める2000万円程度の売上高を目指したいと考えています」

株式会社アドヴォネクスト (たとみ農園株式会社)

創業	1908年
所在地	山梨県中央市山之神流通団地 3-4-5
従業員数	20名

